木曽路より
藤波の記
坤

和書門 類
二五九九六號
一七六函
一架
二冊

内閣文庫
和書類
二五九九六號
一七七函
二冊
一七架

内閣文庫
番號	和	25996
冊數	2 (2)	
函號	177	915

国立公文書館
National Archives of Japan

書籍館印
淺草文庫
和學講談所

藤浪記 下

葛の木小原とおして八月朔日中津川とおもふに
西にかゝりてかへり行にさるしき道をも見とくしとて
大松ともとありしつ備てとくまり町の内天神
の社あり家のおもて石河原と行松の一本ありぬに
くの宮はあらしって水いつましく松のしたとゝて
むといつり木のまさとみや社く遠山刑部少輔
ところゝ住めるたいかの城も河原とも田中と
新山宮河ひとへ申くしいさまんだ坂西裁行り町と出
て田中とゆりむかひとへもとし一堤たまさ原
ありこそなかさ坂西裁行りちいさき道之家ふりて秋いうけも

かくて又は田中を行 ゑ塚の坂のかゝりて中山
のぼりはてゝ又原を行ことしばらくして 千駄道の原 むかし
せんだいといへる村 民家又家あつまりて十六戸 西ひがしの方へとてゆけ
ゆきては山の行 松笠著山といふあり まへは神の
笠のごとし 山といふべき 頂をみれば高くそびえ
それが麓といふ所 山の町乃ちに見上げり 八幡宮あり
此宮あり 日山のかたへたのしまれり 山本寺といふ
向井村 西登の家人乃よ居 千村本に従士也と云 此所に人々多く
それより 竹乃林の所に 田の中を行
家路 せんだいといふ所 行りて そこより坂を
のぼりて坂の上にて 家居して又坂をくだり

藤子川村 挾竹といふ 民家六十戸 いでて田中を行 中津川より家
にいたるのみ山合ひとつくだりてゆきとて四方に
見えわたりて ちいさき 又小坂のぼりて ちいさき原 又小坂
とくだりて ちいさき原 松風 ...
あり とう沢村にいて 又ちいさき原のある 松
ありて 小坂あり 関坂といふのぼりて の方に
信州の住人祢津甚平といふ人の陣跡 八重の
雉子とよばれて 家ふるくして
その石塔あり 又も祢津甚平の墓ともいへど
かの家乃譜とかへりしに 善劉王より七代乃孫を
禰津右衛門尉道直といふ 其子貞直正統と甚平

とゝつく参河守宗直左衛門尉宗道山城守
敦宗四世の後又甚五郎宗光といふその子四郎
光長甚五郎又甚平重綱といふ其後甚平と
名のれる人あひつゝいまの甚平なりときこえけ
と云人とし侍 坂のうへにちいさき芝原あり
石塔原といふ松のみあまたあり 八重羽の坂をくだり
て 天弁驛〈宿ノ口ニ古堂アリ〉宿はいて石河原 橋ある
此橋をわたりてあゆみゆけば里
の松原をとほり山かけをゆくに
今泉〈五十戸 堀ノ内〉まてちいさき原あり 新田村家
ゆして旅人のやどり茶をうりあはれなり

家も旅人のやどりにならねばこのわたりにかとはいへとよし
藤氏の新座よりつたへたりし宮づかひける笛
の音の妙なることくきこえんも今にありし
おりしりて
此たよりにかきしるしおきぬ 笛竹の音にふきそめしさ
旅の身にはちかきあたりの松坂の京
ちいさき塚の上に人の小西行法師の墓なりといへる
あり此人諸国斗藪の後讃岐国善通寺
にしばし住侍と撰集抄にみえたり
されば人とはいふともとめてたづねみんとおもひしかど
旅住のつらさに此あたりの夢のなかにまかれし

ゆへにその跡とおほしくて塚のかたはらにあ
墓所あらたにしかも人ハ河のほとりきよらかにふ
人のまゐる昔のかたみさへ碑文さしてみえけるに
地輪ありけらんかとおほしく水輪よりうへのなけれ
原上のつかに身をいたしけん跡ところとなとかいつまひ
けり秋さりけりと猶のこらんとよみしときれ
亡魂にたむけ侍
あはれなる男ハかゝる塚の昔ならは下にうつもれ給ぬる名のこ
るやうなりしかと　程経てまさしうつもれ侍り
松乃一村たてる中に山神の社のあるにかゝるとみ
石きりたる坂のおりて　桂二本あり一本ハかれたる

の木あまたさしけり　水にのり西行法師の硯の名と
いひつたへるあなり月のかたちとかうたれかし
といへるさいふ○より家にのこされたるを見て
山のふもとにあり出文字のかれたるをいつへたる
堤のほとりにあまたし芝の花の芝のほとりにおほく
松かけし岩とかほとりにあり行まゝに文字の
まとゐる所なるにかへり四方をなかめて山
こゝろしてかへるにかへる小坂の下に居へつゝ
名護屋へ行居たり稲荷に詣て坂のかれ
たり山かけに水をとすしほれたる所を
みなれ橋といふ文坂をのほりてたの山かけに

行あり村の西南のかたにあたり　四辻村より行
道左の太一村の森乃うちに山路ありてたかくなり
下りのぼりの山づたひに　姥ヶ谷村　村の口に社あり　大井かた家に
いたりて二里ありて帯山乃たかきかの坂は
さらにかくれてへくとかくのかたりて
ここは谷にて又坂路の右のかたは崖のほかはなれ
高き峯との間のかたへ嶮しくそびえて右の方に岩
坂をの山口に家ありて小石路し里のきたらく
坂と見えてかくの谷のありけるは
しかるにおつかのしけく盤石乃ごとし　太のうへ
なりたてる峯あり　古城の跡とよへり

ありけるの程半里にはあり是とおもんぱかる
という一二町ほど行ありて又の小松原と
家水横にたえて坂つゝ大杉ある槙をそ西の
しとみえし山のかたりて坂のかたりてあたりの入口
こなたに山遠くしてむかへに對する へこさ廊
みちも様乃間にかゝし いかめしく聳えしり
槙乃はしけし　路に大樹の本松ありけるに
して南とかやり　眼にさへぎれるいと
見渡しく小さるかたよりて太方乃山にのぼり
小神田村ゟ西よりも又六七町程
にして又すこしの坂あれ又うつるより二町

あゆみ程なく逢坂隠りて四町ばかり上りて
つゞら折たいらかに登りて嶺を越て川の
いはね松がねの苔むしたる小坂のわきに
駒をとゞめてしばし休らふ家にいこひ
湯をのみけるをのこどもに今もとこしにおほ
きもの子の流れ出てすゞしくくだりいひける
常もなく白雲の出て来るを書ける人こそといふなる
乃道かはとつゞらをりくだりゆくれとに三町計
のぼりおりて山のかたはらに大くその驛にいたり
家にいりて昼やすらひせんとするに志ばしの家
ありといへども町の右に白山権現とて

あまたまつる山に行てあれば乃志かの家あり
またその山よりのぼりて毛氈をしきてやすらひ
かりそめに休らふちかくしてくれいゐとりいそ
つゞれゆくも山のたかいところの乃枝は比叡山の
酒の盃しいとふまて窓の東乃翠乃
志かるにいかゝみやこ家の題せられしに詩をなし
志いそく奥の八幡の宮をとかし此の山乃楼閣に
多く家の町といひて山乃田中と行くて
かのさかりて九くらてあさけ左右前ね
十四丈間もいひくかん田に名所もいふとかに
天狗岩と名はくそもわかくに松有りてたゝし

わきてかゝる岩のもと根をしきりて流とし
こひぢとなりけらし此わたりみな大なり
岩はしとよりおくにまゐりてなつく琵琶坂
とのけしき十町ちかくもある石たゝみし
くだれは又町ばかりにして西坂の方にくだる
ふかくあゆみつゝしりそなきのみしらさ
雲の上とすらことにしられてなりきしにふる程
とさみへしを出るとかなたへの道をふさくにあそ
ゆきて行しかとも消さめあふみわけれ
なりん程そこ月りしく入て行そさつゝひなん
此上の山のかなたに伊勢へ尾張の海つゝも

つゝきつゝれくつへんとも馬のけりてそのとかゝ
まりてうち過き八瀬沢坂とゆりかゝりて行
なくれおりしたちくだりて八町へのしれなる
此大坂坂の名にし本町ばかりの坂二町計
行きておりおれ松の名を一丁ばかりとて岩前ともぞ
坂の上に満ちて松のかみ木ながめつゝかきつゝ
前にて行いてとまる文のかけて家を
とゆきて出て成るふもとゆりて此家
そとひとつりし坂の行きさより此前にて
くゆくりかゝりて小坂にて今の行きのかたり
志ゆくりてかるしみ小石のし更れ

車坂なり山乃坂のかたはらに老木ありけるにぞ是
よりけふ竹の杖よりすゝむるに道路は袖
とむるをもあやしみつゝ行くまゝにしはあまた
病さへさしそひてゆきなやむ人の有さまけなる
ちる錫とたゝぬもあれはなほしとゞまる
く物語ありける凡天下疲癃残疾惸独鰥
寡皆吾兄弟顛連而無告也と張子厚をかたり
きこふ作りけむつらきかほをうらむたぐひも
あなる様となかしめる人ありけるに和朝の
いにしへ施薬院と称しをきて鰥寡孤独
の人のうれへなくとゝめ給ふこともとかし

後の世の院に白鷺とよへて萬乃なほし
ほひしれんをいひとゝめかしこれほゝめく今
なほひもしられ延喜の左右京職式にも此事
と称しまてそありし悲田寺といふも此の院乃
別所なる人し鴨川の西畔小條と拾芥抄
にきこしなめりかくのあり所もしられて山
あひの左右の石作辨才天の辺
まさにせめ小文坂とのありしてふ寂家ありて
四方ひろく山のちかくしてうつけに則く
西南東水みなかれぬまで流る向に十ある
この地小高ける坂とのうへり或ふたとかり

なつと行すつて過さしつゝて　かくて乃驛
いそし山ひの松かけの山田の中を行く是より
はる松乃なか末松乃梢を雨くゝりし志れ
さゝれ行く雨坂ゆきこしてくりて草宮村
岩ひ松の坂とのかたすりの町たりける乃かくれに
きりしてつくりしけり　河よりまたり志けられく
しまそのあたりきりけは小田村山遠く桃と
龍妻の明とかくしてて百里乃くりとこに
在しなる村なりたいつりなる山坂とのかり
らくかなる桜くらして太社菩ふ　鈴染也
いふ前の一宿家一戸ある所乃菩提寺れと松多く

志きれかとうく所ゐ一里塚ありしく行過と
うれしく松かくきとりの坂なりし駒ゆく伝せ
含きりうくれとし　岸にの坂小石ゆくし　かく征
うるはしく見えなりみれの流とつらいかなる松の市とうなりと流しとゆふ
ありうくりて　津橋村脇に駅といふりしくうるまゝ
辛なり坂のうくすうりて　十里りりさむなとひよ
熊野山の中を志なりてかる丹村山にひしきゆ
つかしくゆく小田村なりし　そこより坂とのかり
又下れり二流の下坂上りけれは点ありたせし
くして　たきらひ流れ菩樹くの中なれは
十里にかよりて流よりて南にりうしさしきとよきう

とられくて行けはりの峯をこえとく卅山
より下ル人村御さ越背荒山にして志きれハ
山あし小た一壇あらく小松原帰きかりて
ろかく御られとも今人ちとろ待りありく
らめ　善知鳥坂　坂下リ民家ありあくいしても西ホと
みゆる小たかくりられ荒山にしてあけもれ
みゆかし　南ハ文かさくり此小松の前小山ふ
西の郡とら丁原へ行にあるをくりくへあ
たゆられとも尾原の民家みゆる山かけひとり文
拾行り　それの稲といふ祢ありあくし
いふるかくしらくるしり十四五町程たいるある

坂と三町ハかりをくりて左の方は山かけひとり
安居の民家あり文まの町り往のかれ右は
旅藤坂といふくるめりをへて二町ともり
山かけ小田人たかし小田乃さら御めくゆ
松のえ行えあいしく田の色にて左の山
きハかり　井尾村なるつけて松おし山の
小見庄の村それより西かし　山さハかし
小ら御本村ある行しくて山さり代るのは田と
なたにしてゆく　藤本村　左の方有さかる方の
山さハかり田の色にて　長尾村なる左は山さ
ハふなみ行りくこの丸山田のとハふ

かい森村　見付驛　此方坂よりみてけまて山ふ山の田んと松のかゝ木みりの本あるも町あり
しと背ふ山小中るし山の寺小鮮の六寺と
いふ古寺町の大乃方ありさきうれしとまうし行て阿そ
ひ侍り先本堂とられしふ拝みて粉似ふして
懐題數てんかり古佛の薬師と安置所り窓ふ
ありしくの人宮と由かしれかさりしに釋迦堂
并ふ鐘つき堂あり抄さいりて別當坊あり
かり由りてあれし乃坊とひいくる由
此寺のゆえたつとんかとたつね侍れハ大野
甘中ともつかりさまし緑記并ふあるさ

文とも芸火のさめ小焼らしきて今いさまり多
志ありしらむら抑も行りもいひつうふれこと
承ま本堂乃藥師佛是何よりて近き尼ヶ池
と以ふれより鑿ふのりてあらせたゝへりさゝ
うの由つふ寺ふ此太所志り以大と文此里可見
部のらち伊の由へとらいふ此寺は大寺山
願興寺と為したれかとさ数くの抑原に
因てそらくうれ此とそのか中りしにかつりんと
しても本堂のらゆへるにとり火くれり
おかしきてのねの為を抑そうれ小山堂小この抑る
法師乃ねうつてときけて南無藥師王善逝諸病

悉除といふの神あり
二月 西河をめて見渡せハ所々ハ家居所々ハ
畠中乃松原を行山に向ひ左に續く畠に 中村
世ゟ過て西の方山の田代千村乃東 木曽乃分入り口 ありといふ
村をこゝ田ゟ東ハ西へ行左ハ川 山里に入る所、
松原を過行く 家あり 歸土村左ハ石川流 津橋の
左ゟ之ニハ又松原を過行くて左に山有乃
かくら團扇よ作ら芝山ゟ向ふ山上に
古城の跡ありといふ 伏見坂 小坂あり
伏見村 民家十五軒 見渡せハ家あり いつまで一里余
松原を行中にて東ハ古松ゟ左に 加子枝村乃民家

こ白た左ハ山ゟ向ひ遠き田中にて松原を行く
左ハ森の向ふに 立ける家こゝに白山權現といふ
ひ奉る所を見てこゝに大河山ある
大松乃岩左にて見わたせハ此岩に向ふ左に
木曽川乃岸に流れ石川のこなたに小屋向川井野
といふた所へハ小松原あり打行て 鎌坂 今是ゟ坂山徒
家小松坂行乃 右ハ河辺を見る松原との所ハ多く見ゆ
とくすゝし 城の隠れ 今渡村 伏見へ
よりあれハいふ 一里半 より左ハ右
此所の北に松原の所以下
右の所 又左ハ右ハ此原乃松原に在り

岩護屋へ行けるに寒けり岩護屋別にて行
程八里にありといへるは大のしさの東よりちい
さき塚いくつともなくありひらけり中は何にそ
あらしめけれ岩穴ありてお白皆南よりへるかも
あなむかしとことへた馬よりこまうる奴隷のやうの
かく大の雨にうやめりし時それ男をとさけし
あふしそ佛をとしらけ此穴にかかる流く
らん人同ましてやすそ死かならん又はいふしなり
かなさいうらんとく誰ともえらしとところ
すらくれどのとふかしふくとえてその世を
沛乃ほきるもしそ作りつゝ先地とつらしく

ものふるまかきまとをいさらしふりふたつしに
うらまれ恐にけるかしめそこにかとへいやと
おもしろつれ舊記とかんかへらに此事あれ
ありけて武烈天皇の御代にいくしても民近段
とられしめけ天災とそうして国土に
大雨ふりしかは人これ石室をつくり住けりと
あるされもたまれはいつかしも此所はかりて荒とれく
あまて禽獣とふかちら田備とうのそて物のけし
らし馬にもらよ出入してかなりて大風甚雨
とさけしに衣かなしひて百姓のまてはんと
けしまれ巻を食て天下の飢とけしまる国史

かゝる志ら持ちて或古文上古ハ國民あなをすミ
さはかりて神武天皇元年三月令を下して
自我東をうちしよりこゝに六年になりぬその
いきほひにかゝりて凶徒ころされぬとも
今運此にくらくして民の心朴素なり
巣棲穴住習俗惟常なり山林をひらきはらひ
宮室をいとなみてつゝしみて寳位に
のそみ給ておほんたからをしつめんと云々景行
天皇のみこやまとたけの尊をして東夷を征しめ給ふ
みことのりにのたまはく其東夷也云々冬則宿穴夏則
住樔とのたまへるとられし住古の土窟のおもかけや

にしんたの方にも此塚ありけれは後ヶ町 民家
行は大田のゆく 町よりつゝきに竹の林にありといへり
大田川船にてわたる此川は木曽川と飛騨川
とふたつ小落合にて流れし出て水いときよし
寄ふして四方はなれにして山しけりに遠くして
川岸にたてわたりして大なる岩ありけしそ
かゝるあられ云持りてわたりのさかさ一町はかり
アヽのおもて讒人のゆへさしとそしもいへるを
船わたりありて太田驛庚申堂あり町とか
の木曽川とならひして行ては
松の繁れる下此さゝりか中一の難所といへる

大岩とも名付られし岩川中にありそのかたちさら
獅子に似たり西連より一里ばかりにて木曽川と
飛騨川と出合しによ松原にて有所といふ松原
高き木の中を行小二丈ばかりなる岩かどの松の根に
はくたのみ様にあり此川の岩も流れてかく
みなぎりくだしてつゞきて遠く流さらし
の木も常よりかゝる様なりといへるたぐひに
神の社あり川のむかひに木立もしげりて絶
岩山の下をながれ行て山下にて猿の籠といふ
山といふさまうつくしき所 坂祝村竹の林の内に
民家あり 松原のはづれの所を行て左の
方より 岩祝野と謂てむかし山の麓と木曽川
かうはれかの山きはて石の多くして道もなかりけり
川岸といふ切ぬきてたりてかゝりたるのちたかせ
野 坂祝の内也 ありこれより ごみ山 岩をきけ山 あり 松並の
の中に川岸にそひて行むかし山と右にみえ
る事一町ばかり川中にすこしくにはやし美
しからしてこの流れて居ならねど岩尾
いふてともれぬ峙り山のきしき川さや
けつもてひなり結をかゝしうつさぬかし
そのうびり村 竹の林のうち にて行いそく松並と此中と
たふ川中わりしちぞ岩ふえかそ行くたどりさてとぞ

あふむかひ山につゞきて　今須山といふところかの
やま山のひらけしところ行かふたひ人の旅人
里人馬よりおり山路あしくして岩につまづき
とまりは船ところなくして〇さかあまたへ
かのやうなる流しめたる谷にあまた人の
らくいと恐ろしきあまりくたかれらへど
みれきり水とのながれ〇そいふにおけは
志りしおてといふなる文恐ろしけりておもし
今はた川岸とはなれこゑ行あしき流れしかも船
さしそふるに　今おもくて山岩岸をもなきゝけ
山あり行くとも楊のさらりて　勝山村

むかしひよかし山とのみ山古跡の名いはゞ此村なごりすみこ
の河原よりいでて猿のみとて坂へと勝山
とうしりそて名の勝の名所にて人の山岩
数百丈きょくかしらに打ちくたりけり
人まよりおちしかりはそのみにかゝる
してそのへをつくろい岩のるもしは地に
しけれたの岸はえた行せし千仭の岩岩
く木曽川みなもとあ渡る家行かふ
人目くらみしもいてながれすっかり
の険難を過ぎしやりとたさ家ゝは
皆人馬よりおりてまたふしくたる程一町余

くらりかの上へ上岩乃高さ十丈ばかりありけり
阿りん石径の右のかたに岩穴あり千手観音を
安置し奉りて枚方の東と西に木宮川と
云なかれ山河ありて行末は小野といふ
木宮川のみなかみよく知れし山ぞ西へ向行
てうちおもし山とのあたり是は坂也
いふ所に小紫山（此の所より出る水山内に出る ちいさき所に出て）枚方へいりそれ石
是石かしとのあたり十町ばかりのところ也ありけれ
次第にくよのあたりて甚だしき中大きく
小太郎が池とかゞりて池といふ小田へ流れ
うちんさかふねて炎旱のそなへよりくるや

又仁徳天皇三十五年国々にみことのりして
池溝をほらしむる数八百以上ありしとかや
とりさしに西の方より百姓とも出来りて
天下太平なりしとの官家はるかに
してちらしと溝池はいまて出雲は枚方
むかしのりみ行きし池ともなかりしとかや
行きてしかりうけとりし坂のさきしらひ
小松さき芝山あり さいつかたの山とつなぎ
高き文坂とすこしのあたりまでさいつ神坂と
いふうつし出て枚方の中と村たかへ小のそめ
かみより原つかり南小狗山城（尼池と家に成りし居城大山より出て行程六里）

山をこえ行　天王坂をくたりて天王の森あり
守留馬驛也やとりは源重之かよめる路に
宮作りあれとやとらぬたひそかなしき世里なと
とよみしといひしなれはしもとのかしこなん
仰て小民の家のもとにあるを何かとさまよひ
の里ともいふ　次
きみか代をもちあけし村里の名をかきやとれつよ
かりん地の郷　宮中より御宮ある宮は大山の
二の宮より社にいり一の宮まて大山のふもとにいり
とらえ宮はら右に民家をもて左に坂の
小田代をまて一里いつはりの山は南方より大山の
城のあり　此宮より都越一里ほとにみえて　杉のもとの小坂をとあれは南の右左に
小田木左の谷小野山をはしり山のこし世野をも
小塚の岩穴村かし　大山城南方のきし谷よ
ころより小木のもとの川のきし村のうちあまた
いそし右小野に見えて　愛宕山とて右につきて
山にいり　かしこの原　此所谷鵜郡のこのらとそいふ　道をゆけは松のきもと
世中の西南の方のいへのかたのてれり東の小山にのこと
えらそいひそそのあたりあれは西のそこより
前戸村あまたしてうしろ芝山にいりて大門のまへしを行き
前としえて東南方の方にいんさ山芝山あり
ゆうに城のあとし　国府をすて右方へとられて

はるゝ山につゝきて黄せむ山なる山のうへに中林寺
あかくらへきりあり　かしこ山やいと山中にうつれ
民家はなしといへとも薪にきもれる森のうちに
民家四五戸あり　山岩村といふとこ所の流
つきそふをしくして九さ山のりのぶ山といふ
いかしへ大福長者のはりとしてうりんたる山をなん
星人さといへる所くてうつみ山を大ふは山と
うつとはしてくめりとして道の左のかたにんし
南に尾張の小牧山（引城）見くうはてらえてなん（引犹に皇奥さいりと云）
此野のなより南よりはるかに東皇いりて
木曽川のすゑをなかしといへとも九より水のなかく

ねかくも川中にうつし入佛山のはのふもとなるにまうり
忠か川あつまより茶名代酒へれつるといへとも今なを
とこの泉をを混しとして書水とをとてはつ
のかりり四海よいたりかへ人し　草戸山につぎ
てはのき山（草戸山に似て ぬさして云ふ北芝山）といふさといかし岐阜の城
とかくへいし付此山と藤なと云ふしとといへと
又右のうそれとの義山乃ひは付きし山（草をかり見て）
あり峯に一正るおもはりて神の社なるのふ
たふる此山乃うしゆにまつくおもきれる峯（風をくの乃ふ）
こる乃岐阜山といへとも要とそ此上乃名おいかたの
山といつやうさけと行年の中御その先なりけり

うしろにそびえしみしは近江に松のひい
つのまゆ千秋万々とり旅人にかはらぬといふわへき
みちなりわたしはあるはしくも細し
梅雨の空にあしまにも秋くいまる山ありけ松を通く
松原の中をすくれ西に行すいけとしるれを御山
みゆ伊吹山といふなりしと打出一目にみえし
しるしとみえ山かしれ行に森の山すえ行し雲もあら
とりをも奥にてかの松か風にふかれ
わたしたる山としてある山へと見えて
松原のうへをわかしを行とつきぬけふ
雲切れかな石の中にむかし一里の松の本立

ありそめ中に盗人神の社ありといふ社は石坂
のいつきたるとそしらせ給ひしとぞ
其より和光の方便ありてうかゞ猶行べきそ
御前にとにはいつくしかく土原の草村か
越ゆ二里ばかりして西のすゑに加納の郷為
行く又岐阜山とはかの山と道の左補太
計に行つかへてあれかの寺と山のあらき
にあのかつまやかた二里許ありとい
利ながけきまへる杉にいつとあいたる
乃姉乃花をみるかなる松風まで
く呼にいよ午のときは小兵衛をさくしつつに

月のよにゆきこゝろしかりき まゐ行すゝ二里行て
志んがの村 右へいりんとあり ちかふ右にあり 此の村を坪内乃とう
志まてう家といふまといふ 又ありけり田中と行
わかるゝをけり うらゆきて畠中乃杉並木を行
高田の橋をわたりてゆく畠中を行大ぐ事
倉の前村左に 高田村あり
三里行 村 竹の林の内町家あり 左右にある中田杉並木 右左町家 竹林
家有て西南とをれし山に遠く見えけり
秋の国の山々ゆくしばしそこにいふちとを
又ぬみ行寺あり 小右竹林よりかゝりて見え田畑
村 左の竹の林の内に町家有けり 左右畑杉並木 高田川ありて橋

すぎて左右畠の杉並木を行 川辺村 右に八幡宮
大竹の林をいでて右に畠の道を過て 加納の
城見ゆ 杉並木の内行て町を過して 加納駅に
入里の宿に泊る 扨て右に鷹匠部屋へ行けり
橋ゆきて 行かね町行橋といふ町の右手に役人
行きかゝりし文しばしゆきて かしこの
家より迎ひにきりあひて
亭いひゆくつゆつくれ鐘の声きいて
起られし
三月 朝ゆきに加納といふ所を出てゝ
出発分ちさとしとうけはし 一里ほどより

かり文字なりえくはなせり町村かく従士乃
家ちかとあるそこ家に家川ある田中を
村あると行　本ら村いよ　田畑乃村あるみ
ぞら見る村あへて畑中　加賀島村いよ加の村あるこ　湊村それ右の田へと
とうる村とれとの民家　郷戸乃渡を行けり
まてにり　郷戸川　船よりて　郷戸村よそ乃右
うら御る田中にてにり　四方山を回し　家あり
て　あたりをみ　あまた村右のた左にりいよ　田中乃
村なるこし行とかへりこれて東小のにうつる
り　いよして　山岐阜山をそ見る　本瀬村あへて田畑村なるこ　本瀬
川よりて民家本瀬村のうちにり町乃うちにありちい

さらに橋にわり町中村なるこ　みえてらけ驛をえらし川小川ありつ
あんまり村あへて畑中　宮天村右の左より民家左竹の林乃内いそく田畑
ありごとの橋にのりて　田中を行くて　堤にわり
川を渡くとして川の水たけ　この堤のうへに行　右左竹林一町
ありり行くまりて　渡り村民家にり　渡く川船わたしてわたせ川のまえ
とい利まさりて　柳原と行　ろくの橋にとる中文
堤乃うへに行堤の左右田畑　右に　大垣の城を見そに
行いさ一里とまいとふかり行て　堤の左右
森あるその下の民家ろくのうら　あり　堤のたいさよ
大垣へ行人をうかゝふ　右左小田　右ハ畠堤の
うへに二三里町にりしてあり　左たに小田　畑にり

松あことを行くしら庭村（ひなか田中 村なし） 北方村（北のたかより いそ佐府）
いまそび村なり 赤坂驛（里の名に赤坂川 ながれ流る） 右の方に赤坂山あり
左に翁森のうしろより社あり 行て 小田村中に
貝かうしいさ西なり 塚あり 右田とふへん車坂といふ
無右村（右はかきかきたり 田畑左方山かかし） 青墓驛 むかし 右世里いはや
はりへて民の家のそれかりかしこに 屋ならき 遊女
あまたいみしにきぬに 手なれせ義なれかし 今は
わへかそりきにいり 金の西かたよりへくといはんか
松あみそかくきゝして世徒なり 地もとおもしに
うり義 世のかなしひあはれ川の御歌にいさなむ
有るへし 此宿乃長者大炊とふへうすこし

洛とあのくさかりしかはりとしいへまたうり十四五町
ゆきいりて右の方 杉山のうしに中宮大夫進朝長
の墓あり しの墓（朝長四人の墓 合五つにありと云） ありしいへられたる
ちとせか無くいとへて今もむかしの表とかて
孫ゆく人の袖をぬらせり 昔の人筆跡の碑は
のそひこそのつみきをまつりにゐむとせしも かく
ふそありし光とおもひやりもさつ
孫衣袖ぬらせしと青墓乃昔にかへらせぬ
たれのうらみん ひとりとて 青野村り西へ
よりかこと行に右は赤坂のさ原なり 弘法
青野が原といふ 嫌のかけにかへりてきびてしばいかれり

やへ〳〵の草葉にもおりのしれぬ年しも見え給へ
霧しもふみわけて菊ま色〳〵にかゝやくハ
花のこゝろなり 小倉のとのそめハ 中尾山とも
くしておもしろけれ 此山をすきて 梅谷山九
折りわけしく をりつ山とつゝ花さ塚をへり
南大門のまへ露わかに見えさる院ふちいされ塚と
前しりあそこ大樹の松の根ふしをわけて
ありみちの色乃雲に海しかわけ二千天
あけりんとも見そその末我て古名はさしけりせて
かれいつくに四方をみわたりけりとくへ〳〵ふるさん
世にうつり我熊野乃岳半の花をさしの人乃

老〳〵ならむかし ねの人の松といへるところの野乃
初ちさえた ぬきの松方一里ゐ〳〵わりあそこに
家に小松にさ〳〵ゐけり 蜜井驛 岩代ゐ〳〵に
名川なる浦あいわけとらて 家にいてしめていにし風
にりまつしくみぬる雨ふりてくるゝにうく〳〵
かりき思ひのこゝろにすこしさしあの
けふさいつりけり 里人〳〵のいふやうなる
しゝしん 岩井作のいかにねとうつまず舞て
をしぐゐへ〳〵かぬくきさ此ありとよろ人なれいなふ
作りとしつかれ 此寺に藤原隆経朝臣乃
よめるなるへし 其花中莫古も歌にいて

香しかをれはふしきのおもひのことくとりの
はなのいろしるきいろやさしくみえしを
女のかたにしとゆうかりしてさらにかへらぬ
まかりて梅や思ひかへすはかり永享の
ころひ関の東のほとりさたかしかし坂に信
濃持氏卿（尊氏五代之孫 鎮守府将軍）の御子春王丸安王丸や
うやはらかにしと持氏かうひさせ給ひては
結城の氏朝をたのみてしのひかくさせ給ひし
を二人の下ゆきの御あるはかなくみてせめきそ
まいらせいゆることつかそかはきての人々とす
るのしかせんかもかしもそくらのほとりへその

これらまれにはありしかは嘉吉ありしめにほる
ことやさりのさんをらさせ給ひけると
都へのほしておもひさそ御いそおほかし
ゆかにしし菩提の金蓮寺してそうしさひ
ちまんたうのゆとあつかなのとおおかしくさ
のわたにつけて菩提のみさいのいきみて
まいりけるにもこまかくとりたれに御ゆかり
のきさりしさにゐなもそくの御墓は
ゆかのうちと宿のありしとよりいもも
さいもり聖人の御墓にたち寄りてすすめ
あらそふなるそれからしのしの御墓かのふもと

いはそのかみしらす人出にけりとしいへり
内の御つゝ金蓮寺よりひとつ行小町の左に石の
とりゐありその額には正一位中山金山彦大神
とかゝれたり代そ南宮たり山大菩薩の御名
社あられより八町ゆきて小寺のありけるとて
いへと国史の載ふる所にかけてあり
いさゝかそのかみこの大の神ともいふ村に
りしかあらす吐す帰化して神となれ
ものとも金山彦ともいふ日本記ありて伊弉
冊の神のかくれ給ふとて吐給ふ御たへ
入りけれとあり中にありけり四五町斗して

金蓮寺にいたるかへさかきの屋のほとりをみて西そ
たより人くさつんて他あまり寺社行てはかなふ
細き入て竹の一村ありてそのかたはらに海
中にありうかへたまとことそありけるさへすらの
みくりさせとしるへとなりまくほしきものとしれにける
いかはかりかの武士の世をそにおかつゝね
人やいにしへ今古世よりけふ思ひさて
ねあしやつれまことに海いりてすなしてたゝとのなかり
けるかこそ妹の草子にはさみあみてこらふる人
あれ昔のおもかけしのはる御かみかへ
かりそめにはいとみさりけることはりくにきすく一世

松ごとにすみつきし四方のあらしはげしく
木のねかれてつまさきしといとしげかりけれ
かりひとてし
ちかきころや木のねかれてあさけんとしし
ためしそれにしも見たてまつらん代をもりとせ
とかさんとしてひさ久しくとましけせ
其御霊魂のいよそらうつ見るゝはつるかと
すりとのあれこし木左力とはそりてみてしうふ
多そてまつりけれ社といふのゝ仰せこして心ひるか
ら次いかまぬとていえしもれくるをあへとそり
かくいかゝ申し武将の威をおそれおとかさぬのこと

社りまやひみしく荒し 仰せし 宮のいにしへ
畑乃松かきは左右に山（芝山）ならびたる山しらふ
らうし 野のゝ村より北にある人おほくてとら
るかたの社かれ杉りとしもふ草葉の枯みとれ
ワれ行神の家つてさそれ野上乃さやかなり
亀し今をとゝへ年の時せんにのそと
宮より一つ道さかそへ出て山へ左里中とあれは
主りかてりはさへ行れ堀なかすくし師とて
はの左に園樓乃山とゝへおもしろかりとふみそく
たそりそすれ名こりそそしいとさまりうしこ
といかめし田畑の松かきに左右山（嵯峨）にちらし

こゝの村（民家）水の方にむかひて桃くばり山と
申山あるよし慶長のむかし石田光成等
みだりし時源乃将軍むかひましまし給ふ
ませ山にましまして関ヶ原まてかの逆徒を
征せさせ給ひしより此ところをせさせたまふ
山とも名もありしとぞ此勝山とも又いふなり
光成さ豊臣の家殿下よりたのみて権威をも
ましくして恩寵をうけふかくうけたり
せし殿下かくれ給ひしのちなほいはけなき
国家をうばひとらんとはかりしきん反逆とくはだて
しかしながら天命のおそれをしらずして身と
白刃の下にふしてうしなはれしとかや人の口に
のこせり秦の世おとろへて趙高か悪行をなせし
ためしにてもわかるにてはなかりけれは世にそ
かはる例ならひよなきを寝覚めて畑中の松
なり関ヶ原の驛を出て野上町の宿に八幡の社
町の中ほとにあり此北のかたに山中といふ所あり
ふるき里の宿にしえより此地へ八百戦
場の跡なり社もありこのあたりをまつりしく
たるも寺の長をとむらひ所しるしにことし給
きてとのの社もいにしへなるよし寺社とも
し給ひすいてまいりなんさるいにしへあつし南

にあてられたれば山のふもとにいたり越前中納言
の陣へはせ行しが山より陣をうつしを
かしこに石田光成か家にまかせおく
うちにきらせ関町のうしろ二町ばかりに
かの戦場を引けるか顔しかめてにげ行ぬ
揚しつゝさて行しが勝ちにちかくて家
がしとにちかゝられはそのとりしか
月のあいだ寄てつゝさ夜々呼喚の声たえ
してんのころにはかまし不知行くさ
竹中のいふかいしが何をとらへ出して重て
揚げつかまへてけるに顔をも御覧に供奉良

し平条といふものゝしけるは元飛善兵衛もとは
山さきにてかゝる名をきこえし所なり
徳川殿にしたかひし古戦場の
文にて見る海の上に候ふ家の所は其年
よつきある者はいとつよき又に兄が宮居
都より左のかたに筑前中納言の陣をしきて山
三ヶ所に光成が陣取りしはいはゆる山鈴
としけるは十四五町はかりもありしが今ある
本道をうつてゝ十町ばかりそれより
二三町ほど北にて大関村より北にしたがふ修の
関原といへるところにかゝる天満山みつき

御位は大弟大海人皇子にゆつり給ふへかりし
なれと清見原の天皇とはなれて天智の皇子大友
清見原みこしりそきて吉野へかくれ給ひけり
白鳳のはしめ天皇東国の兵をもよほさ
んとて此国にはしりこえて不破に陣し給
ふに皇子も又西国の武士ともをひきゐて
たゝかひにむかひ給ひけれともつゐにうちまけ給ひ
すなはちかなはせ給はて天皇
そのゝちにつかさくらゐ[illegible]
ならしめて不破の関といはれしとかや又
ゑて後の文養老元年天皇美濃国に行幸
ありて彼の行宮にいたりて当耆郡多度山の美
泉を御覧ありてかほをあらはせ給ひしに
続日本紀にも載たり今此あたりの国中に
りみて瀬常の如くなりしとて当皇
人にしたかひねかはせ給ふよし関の[illegible]
色の[illegible]
せりしたかひて[illegible]
[illegible]
[illegible]
一村の[illegible]
すこしくたりて小川[illegible]

蒼小川といふ所の四實乃蒼川なりけるにて
忘ふつゝへんよりけ代まてかといふ乃川をと
よ乃んさすまへにけりんとの四代あの原乃りい
さふらうすみ給ひゆへされ久しく
はりへさせ給ひつゝも清見原のひろし給さ
にいつれくいやめてたいまゝしくすし
かくひしりし流
よ侍けるしゆへ此るれと忘代かた人を
忘や新實乃蒼川 世川乃稱代ひて此路代
のかりて 古縁村坂乃名てりて所ひ補西に
山きさ世とと山中といふのかりに山中とれ

民家あり西方に中山村あり其所に竹の林なりける
にも又やといつ是そ源義経の下りのとき
人〳〵もりきりひ由奥州におもむき付旅館と
せし一所といへともこれ前に宿ところが
側といふ義経にかくして常盤前にしのひてこも
り給ひて北しゆへ世にたくりしといふ
所のもと名古りうふ常盤乃前の墓といふ
石塔三つあり母一つは此所のとしくとにわり一村の中にこれに
り社もありといふ常盤は義朝討たる
後三人の子供をもとたかに清盛の妾と
なりけりかの人にまさめて後一条大蔵卿

長松の素よりかれけり此所よりそれ〳〵の待りしきる
舊記に載たる所にはいつれも侍人あまた
いとゆかしくおもはれて吉野のあたりとのそのあたり
伊吹が嶽にゆきて雲居にかゝりみえけれは此ふ
ふもと一里はかり見えてけるといふことよりの道
のさかひより山のはしを行く道にして吉田里
に行くとして民の家々千戸あまりもしとや
今まてはつゝかなる所にて家ゐ六十あまりには
山のはしを行くにてちいさき坂あゆみて侍り
いまはの驛 今須の宿にて 宿はいつれも山のはし ちいさき 芝山の
田中也とて宿ゆかしく坂のふもとのかれと

車返しの坂といふ文字はいかにも侍るといふ名
ふりて 古き名にておかしく 寝物語村也の里美濃と
近江のさかひなり民家二十はかりあるうち
いとをしき旅のありさま川は落ち流る猶
いつくの山なりつゝふかき清水流れ
て宿はいかにも山のはし嵯峨の田畑と見わたして
ゆく道のあたり野州山 嵯峨 ほか余呉山より
高し是のはしのものさし山より九山と云
そのあたりもとにして高くれたる山のかた
常菩提といふ山法師の寺にありといへり
柏原驛 此所も宿はいかにも九山の梅しにけり

の行宮あり熊川といふ村あそこに川の橋のもとを
すゝみ丸山の際左にありて熊川を左にして行川と
無そて小田にの小田のうへより常山の方へ
なりうらの山々の行左は十山なそれ左は小田
ゆしひく岩か谷といふ方へ行みちにより
長澤村 左の山きはに民家七八戸ばかり 家ゆるさる行左の山にそひて
行く 粉川の坂より 小坂山あひ 左ね松の多かにより
あるそて 梓村 山のあひ あり 村のまへにあるきの川の前
めぐりて行 梓の民家ある山家のありそのまへに
かの川のむかひなるは又ちかくて山あひと行く
二町あまり又川 左の川の上流 とてらくあるは山あひ

と過て松のもとを行へいりて左は山よりちかし
一色村との里のうへの山際に常楽寺といふ寺に
かくらひかた縮蠻寺ありて古の寺の家の山々
ともされたりそのうへよりかくをつくといふ里家
といそし松の下に左は黒田川 山ぎはの里 あれ川の方へ
あまりて黒田とて家の前を世川を行里より
みられあるといふと川のむかひは山あまたあり
醒井驛 流るゝさき木の下黒根より流れといふき
いつの流のあり居ありあれへ水上みちなるべし
の程さへ有りかりにいかとさすかく 流るゝ
宿町の中とおもはれ行をあみすりしに

石地蔵と安置して堂とすいふ院と号せし
の地なりといふ水の中にあるといふ岩なり
勝しけ岩といへるは日本武尊東征の時命へ
くらせ給ふとて此岩よ勝給けりと申伝へさ
哉給ふとなり志のおゝくおもしろく日本書記
及古事記ふの記載なけれは尊を以て
きたれ給へり其後小碓命と申たてまつり
ともまうさるゝよりは心かしこく景
行天皇の御子にてましますと西の方熊襲とう
させ給ひし時熊襲川上梟帥をうちてまつりて
倭建御子と申給ひて御宇四十年秋

東夷おほく叛りそむくと又此尊に命して
うたしむ東夷みな王化にしたかひてさる程
に尾張にいたりて尾張氏のむすめ
宮簀姫とめとりて月日へて月
とゝめ宮簀に行のそ近江の膽吹山に荒神
にうち向ふ剱を解て宮簀姫の家にとゞめ
おはしまして給ひ膽吹山よりのほりたまふに山神
大蛇（古事記には白猪とあり 日本紀に大蛇とあり）に化して路に当りけるを
ときかしてのまゝにふみこえ給ふ
神の使ならんとてふ神の御とを越ゆると
しそこの使にはりしかるにさらんとして

はれゝとまさ出て行いそかまに時ゝり山郭
雲ゐなくしきりてしゝ峯小霧し
若くゝなゝ文行へきもなかし棲遑なるけ
かなん所のしら次画とも霧ともしのぎ
なわかりに行りつゝふかき跡ゆへくなり
行ら須もよして酔ーもしそ下乃泉の
よいふのそ其のと飲て醒ぬし妙酸ふ
其泉と名つきく居醒泉（古事記に居寝泉 居泉とふと有り）ぞいとど
りきまれさとけの乃ーとなりくしもつしき
らふ中しれくもしく女志すりあ秋ハつも
くらひしまふつやそのとのこととすふかり

とのこゝみふいなかまつしれ男なれ行
りさも仰しれとそ鳥ゐそふかれてもしるもいく
もいとなのさしけありに湯づきなのまれ所ふ
にそりさけれしきてあかれといしゝまれと
神もいしつましけて此里らゝき伊服岐山なり
おし同様しふもとれてそこに峯なれそ
高もいとさむくして常なゆれかとく今も仍
汲みなる月の七日まいりてかの山ふのかれさ
すもの二里ま志のしめ折かそかさうれたまの物
つくも都湯のいつゝ有須峯小忠にいかされ
く四日に雪れかひかなとゝとこされしすいの

たかに物語の作のめつ郭より又ゆ珍しく
方七十里のいはるゝなかをふ波打へとつゝり
こゝしまて北人ゝ住むへ里人も神まひ
おはせし給ふ人もかしこまりよりかの人のよ
えんしう我れとおそれはもいはへきしき家は
らなてつ枝木てうちしたてのふ流れしも古か
うつれはなつかしきまていつしもかくりすそ
もも字ふ仰りいくとし給く文化そん
ちかりすれし谷しいりすちら人の浦はふ
もちりて家ふ人杯も河れ流人忽罰とかり
つかれは御しりとさ何しておもしろく

かへし枯き枕に松のかくれ小馬場とねやしき
あと仰り山乃磯のふむかの人ふ小志さもし
土乃家ゐせられ給ふてあやしき仰りおかしく毎
つゝふかつれて登りしてやかきぬにはもとの又
風ふいそ忽へし来りつ往も相かすし
そのかけて相やにいてう来葉きいかふいい
ち嵐てきしく枝店ふおきつ家は吉に
姿をもしてりて枝とつ身さかなゐ
條ねとの来葉は嵐のくもしさふ姿も往かく
さわか井り嶽(やけ)四里の名もりうちとしれそ
せのことはさふ似てれとはふつまひくたりし

はりせしよりかく口に海へ出ゐ
四日　はじめて宮川といへるにいたる海に
此宮のしもつまには川の橋あらし　しらへ雨行
つゞけにみつさをたるゝ海人の袖も雨のしれぬほど
しほしたりしたゝかにつもる夜床州なりけるに
見えわたる星人水をあつめしつきねざり口写
くる宮川といふ村の南なる名の名山の方には小田
と思ふさま皆中山をいはるてはゞ川の
たらふ所のかみし橋のほとりしなりなるを
らしれはれ女人に畔道つたひ御へ海なり
川上へと此るもとに此川つゞきの名もあり

見ゆる山川なりて伐しりあるそ海つゝきたる人の
勝の所をもやくとして大ねくたはるゝ所とり
川むしろへのぼりをいとしてうら
こし畑田中の松のえと行ゆかいたる山え
ちうれなすこ四町ばかりとに是れよりつる中山への
石村村といふ田中名の海　あらし川まかせて来たの
しさまう山よりは流るゝ所　樋口村ためのあ二三
町ばかりゆれたふかなみ村なのさとしこあらふ
両手の流しり大わたりまえたる道ぞね所あら
松しも御町の中に流るゝと川として橋
はら南にたかの松の尾山とて是ばかりつくれ

山ニの峯に古木の松一本高さ百丈
ありけんかの木のもとに寺二十坊ありしか
蓮の糸もて織給ひし曼陀羅安置したりしよし
寂ハいかにかハ今ハ絶たり村いかに古き小山のさハ
たとへ田の畦にて山にむかひて其山の中に蓮華寺山
とて山ミの七尾七谷ありて高野の山に
そのかみ似たりといへとも　番場驛町の右に
蓮華寺といふ道場を見ゆるいにしへ六波羅
の越後守仲時京のいくさにうちまけて関
東へおち行しとて此寺にして自害せし跡
とかやてかの寺にゆきてあるしの僧といひそ
いひつたへすゝりありとといひ侍しかのとき
死せし武士二百五十余人の名を遺書
の過去帳いまもかし此寺にのこり宝とし
人皇近くして大臣の人々もきたりしゆへ
あはれ山里の末寺の御ことにてそのそれのみ
いよ主従の義とかくして寛やすても御
らかの人々死にたるしりてなからせしそ
のいのち佳名を後の代につたへまた
しいつしくもかくてめてにそとはり
まされなさけ見えて此寺へのこしとり
業のことおもはさる龍山　町の太田の一向しゆうハ蓮華寺

此山のしたにたのもしきあまたありしと二百
余年さきまでありけるといへども今は
此寺もなくなりてかの山のねきとられし峯
にのこれる石塔はむかし行仲将の墓所
の墓といふ鎌牛の角のいりたるなりと
わらはへの光をさして侍るもあはれなりき名のこ
なをおもひ出てまとひてその所にいりさぬ
物のなかにかりて家に見えし世に行をかて
山のほとりを二町ばかり行て
元番場驛といふ所に小家四十戸ばかりありしの
番場といふは世に宿駅にて山也

ゆひの松あるは左右より里のさかひより
ちかきより一町ばかりゆきくてな左右山をはさ
み田の中をゆく山のほどを右は山をさ
ゑて田の中をゆきて山のかたに行て小野より大坂下り
左右は山にて右の山は小さく岩に
ら耕て盗人出ましてなる海盗此下に
かくれて旅人を殺しけるといふ
をとへば左右の山にてそれこれ野山なりとそれを
むかし山といふ坂のほとり山さきの松あるを
とめくる右は山左は山のひ小田あり
ばかりかし道の又小坂との山に入り道のさかひ小松かし

ゆきくゝ民家につゞきてゆく海河をわたり
寺院への中には山河山四方にさりていとく
らにありいかに世俗へ（すみかを俗をさる）らしこゝにわれて
志のゝ外の物をあらしてあつめ化させてあつさを方なう
つかなうつもして只思てゝ湖として西
小乃わたさの一つうさ乃小竹生嶋の浪よらう人
敢もぶりうあれうふりのくるけりてす浦
く舷浪のみゐ留らく船乃行ゆき安湖沙
免今りてうりさてあれとを化乃山おゝし
そまのゐされりうらくみふ色りもそう一つう行う
こ経らう年か西湖乃十景も世らそし

そうへおもけとさしれぬへく覚えて世にしらぬ絵
朧月夜そひろきちうさらなれく志りし茅屋
小出しけく
しらてと毎いふ事を筆にてその紫をとゝりへぬう
小舟乃浦つゞくしてゆ浮ゝうふれり
そのにも岩もあれ小石ましこれのしをうちと続と
あまねする思たり湖水と大小のくさて湖のほとり
とこをなれうりて見るもとこに伊山麻凡のこと
らふ見へ待りけるて左右山さい大き
田畑もあらふして湖の流遥かすていさ
待りとこ四出てゆくりとみうちきいやすてる

半里計ありといへり行末は又山ありけらし西
にあたり松本といへり 矢倉村 戸六七 矢倉川の
橋わたりて左は宮山 道より山の方にゆきて当田 はなれて矢倉川なり 右は湖しきり
小田のほとりより山そひにてうちいでゝすゝみて
松本といへる 島本驛 家四十 町のうち 右は山つゝき
佐保山へ入る方に寺あり田中 南は松本と
と行よ東南西は山めぐりて北かたく は芝山あり
小野の宿 家百八戸 いて松本は沢田中 左は宮山
かなたより一町ばかりゆくと左は山にさは
右は小田の和名み一町ばかりはしる小ちいさき
松山といへり松よりてたの山さしたるに小野
小町が志ずかしとさへ誕生の地なりとて小町は
良真の娘なれとも家は佐しかるべし小町か
その氏なりゆへ小町も小町といふなりしかり
人まつといひける松や妹子王此里に住めるゆへ小
小野氏なる女いふていふひつくへる事と
小町こと家あり住しときに出羽国の守安
くあはれ文かくて有り 原村 家二十三戸 東のそく
田中左は山ちかし西南のはざまに土
して小へ志なれる山にかゝりての荒神山といふ山の
うしに寺と坊ありといへり 太乃寺 西方 とてみる
に佐保山乃麓たゞ大慶のかすへ雲にそひ

日野城ハ湖のおもてよりおくにして家ありその
所より一里ばかり東南に地蔵村 印本十三丁詳 北蔵堂あり 家居
いと見しらまく右は田畑のいとひろくまでみわたり
ちかく太吉山をのぞみ二里ばかり行て大野川
あゆみて水海さかりてうち渡りて入るにいとそそき
ひろれその辺りより一町ばかり川にして数百人まち
うかむつ〇を野川より橋わたりて流れのして前後
大路村にいたりて田畑の中なる松並木右は太山
遠くし南方の峯に山の麓に一村の森あり
まかり行をへて近江路のうちにて多賀のは
しる人しらて人のなりける也

ちりそれを参詣の人さしはさみてゆき行人
多かすゑの遠かれし折のひかりてつゝ絶え
高宮驛 町の中右に大なる石の鳥居たてり
額にはしるし多賀大社とあり此社は西に行
松く木町にしるしかたはらにいる宮所なり
り川をわたりて大上川といふあり行みちのへその
近江の安に大よりかいなきなりける
の山あらといへるかたに川を出あり
かつ野洲川の辺をくだりて雨にあひて
水うき海より流ありて瀧あり
まさ海しへをしてこき入松なくして辺りの

す前くらりかうさき人の住所と思川らし
所ありさまかしひとめいとやまくらうこほとそ
世川のかわさうりをあまりかくこのかうほと
去り坊前しの民くてそとそのふちとゆ所ハ
せのけたる様義りのたち鶴ともうしてを
けさ川ほりしき山にそさりはるかなるてこを
行路難山かしそ行ゝとて水かもすゆと
白居易かかきりもし人かきそ見る様
八ますゝ去年ありめてきみうかきれハこり川のさそ
行すくらんほと川ゆくてありてたえしとこ
りたむるなと行きりてふ山とゆし　麹かやえ九村

ふのよりの義めの節ふ卅里ありけむとしかうし
まちの民の家ところとたかめし杉かし家所あそて杉家
こたえを畑なり山を所し右れし二村の森の
うら小様を二町たらり行すくら町　民家九十軒
らとりふよのとくもてうたいかのとし旅人か
多くいりに人あれしあるゆえとる杉かみそ
畑中をとりたえ山をゆし右れ二方西れの
同しり荒神山一里ハかりあり見てるそゆると
生田町　小家十戸計　四十九村の内　家所の市おゆる　たのさみ　山をたちうしらかけ
たえしり皆めく様りたれもとひの太面右　八幡山
まけ山の麓をまかりうち　又名田町をえそ四十九村かゝるかきの今

七八十戸ばかり田畠中を行ば山道をしばし過て松が
く田の中を小井ありてゆく〇けふはまでゆくと
かく左の方一町ばかり行 石畠村（民家十七八戸 道の左の方にあり） 二十野村
民家は左の方にあり 枚村（民家四十戸 左の方にあり） 二町ばかり行て 枚村（右の方にあり 枚村の内なり）
民家七十戸計（道の左の方同北の方 田の中の竹林なり） そこより川をわたりて
古枝村より右 民家七八十戸（道の左の方にあり） 山をそなたに
して大阪の警衛のためにかくれたり
人々行かふ所の婦人をとくゆかしくまいりし
ありしかども馬上にして紙幣をいたしてけり
よくのものにしてそれ見かへしの人の
ならく猶ゆくゆかしのさしけ我ふ

らしつやすく七とゞらすしかるそさき新山の
みつかしに似て一つの松のこゝにかゝれ也
皆植村（観音堂有 民家一百計 愛智川まで家つゞき） 愛智川驛より行て書の
しらは家ありいふかく松あまたなれど小松原風情をそ
とおもひしが川の行手も帰りて愛智川を渡りこえて川の
そゝぐしるしにはつれにとゞまり川をうち諸説ありとぞ
左ら行へつき川の道のさくにかゝりくりかへり
ゆかしくそれ柳原をそれで松あまたなれどあるを
みゆ小幡村町中小小幡川流れ橋行けば
左の方に竹の林もあり 町屋村（民家十六戸計） 村の入
つゝきより西北を行り右の方に見ゆ小寺の新

端にありて右乃方へ入て建徳寺といふ田乃中にあり
村乃中に旗山あらしと行てせましびか花村家乃森といふて
左は田乃西にて山あらし右は山乃きはより
そひて行く程に民家乃あるを見て田中
大松よしにあつて毛山乃下に長命寺として観音の
寺とせ給ふ所なり山下に民乃家右乃方へ
家あり是より稲といふ谷乃うちのそれは大きなる
山をんの峯を雲よりうへ人見しるより色
大いなる村にあらそれいかなり八間つ新縁百軒あり
いつもの松原にて右の方は小松原なり程あるかあれは
大様の民家 大十一軒許 民小堂有 行いつもの左右田中

西生来村より左は田中二町ほとより田中乃
武佐駅 家の山のあり西南の方にいささか山乃かしこ
にみえし山をめぐりてそれより中に入て都乃
富士と申せしをめくりて松の中を行て右に
畠左は田西北 太の山の 方のいろより岩を松の崩に西
在は小八幡山といふ其後西とそれより山のそ在
北叡乃山の方にあるにて 比良乃山 北乃谷にも見ゆより
在の方は小田の中にて田の西にて下乃道は是山也
馬渕山といふ所は右の方にある小田にて松の中
おしての渕山小なく右の方の田中にて民家
是の馬渕村 山の内あり 寺のよし田西の方に入りなる也

西のかたはるかに竹生嶋をはつかに見やることもすれ
ば同村山乃麓より家ゐにいとなみて民家とも
こともなき里なりけれとも　松多き田中にある小山
ありとてこれよりいくかりは遠し　横関村にいたる
横関川　此川は西の川の様さかはなるしもなる
さゞの海に入るゝ所にみつる海よりて船とゞめたれは
然乃水涙つゝあとゝなくしはしは乃岸かへはたを
ひとへは横関村の河邊にあゆみしはしをかれたる
鏡山　みなあをにちいさき山乃半らに見られ
いかにとやさてかの海浦にしてもまた見れは
山にかゝれ見えてもいとさはし　その麓乃老と

いにしへのあとゝし　歌ならねはひはつねに口すさみ地し
錦のつまもさき老そめし物名意義からし
日数ふりつゝ錦のやつれもて鏡山をとはむしき
老そめし物名も　道のたゝふるし　大福長者の
住しかりけるのやうなりふちいさな川のかたる
善光寺川とよつりてみたる田中にも　松多き
とおく　鏡宿そことよりて家居二百戸計あるなるの
宿乃おはりみたり　鏡山とならふしく　山乃
ひとかは小湖の西北此のほとりにのこりすへく
あつり山を見と行きめる　松多きたゝき山は大
古田の邊りて　山のかゝる村里の北に

小川をはしりて田中を行くに左は山ちかく
右は湖にてその間わづかなれば水の面はるかに
かの海おもしろくみわたりて むかふの山 平野
の嶽といふところなり 大藤原村にてひるやすみし さ
れば尾二十町計右のかたにあり 左は田面なり ふ
湖あり 水よりたかき所経二里計庵寺山にかくれし
鴨長明か海道記とて人のしるしたるに 都をいでて
旅人 世の常にあらずあはれなるをきかばいとかなし
あやうし行きしてあるは海にかよふところありゆく
おもしろきかの行路のかいはしきに川の
開けいかなさしさりとしめと見あり こえけて

行人ことに命をかけて里ともいはれしところにて海へこう
せとかなしの原とかきつけしをのせきつの世
さむくやにけれ ほとかくもものききし旅人の思ひに
むかしみやこにてそのかたよかりしおもひなれ
あはれ作られんまことにあはれとこそいひけり
青墓 鏡などいへる宿につきてあはれなるを
世里の内を行き行きしてかなかの給ひし
さけきの原にて行けりいにしへよきにはなる
ふるの藤原堤といふ所に世をちらしてもひけり
駕籠とめてよしにて安藤判官貞盛
かうげとかなしし中へ下り富士の風にむかひて

よそ村も北山のふもと小田にかゝりてけれなく声
もし侍るとて侍るかの三聖と松嶺風藤原
まそれしられけれはまた此おなしくふかうる
此浦の辺もかくりてあそへしこうしてまかりか
そこに哀れしこふおもひきたなりき湖の此
ほとりに来てそれか小山のうへたいてもあらはる
あやうき堤のあるしいへつとめる也 小堤村
ふる堂女六十戸 藤原の田あり 小坂とのかりてそへふするを
川あり 堂のしる弥川といふ 常ふき水たゝえしと
いへとも此川の南方のに辻山にかかり川まきりて
辻村 民家三十戸訣 てしもこ此地蔵堂古跡ありとにありて寮

いつもわかれみち左は辻山右は田中ちかき侍左を
山かけちかくし 西南ふ山の間にさして行ほとに大津の
三井寺山もみえてとかくやかはりに堤よ見てわかれ道
さ 小藤原村 小家百戸あまり 家ありて 左は吉田村の田
とかきて十町ばかりの堤にみつ山に其の
けり 嶺光寺山にて 中にいれて村 家あまた 十三戸 ちいさき溝
とかきて 野洲村 民家五 六十戸 ある所 川にかかりて
此野洲川といふ 浅の橋とかかりぬ水いと
あさしかりつるとこわたる〇と同に
けふいくほともかくてもつひにかくて
何事にてかくしも野洲川をわたりて鏡ゆく

しみてとゞらふへえしつゝゆくて
しら浪よせてとゞらふへき夕霧たちかくし給ひ
此湖の川浪
うみもしとゞらぬる波音寄こそ行来もしらぬ
つきてよ川波うちよりて田中と行く西に
さしてゆく山かさなりの嶽夕くれの色もしらず
みえてかしこの峯にいづる月もいと思ひ出
ねがしきもれて
その暮つかた野川ぬまてやすらふくる月の
ゆふやけり守山驛 名所 紀貫之のうたに
志ら露もしくれもいたくもる山は此守山の

とまる人しとふ木のまかけもゆかしきれと月
もろくやいつさあり小里人にひかるゝ馬
すがひそのひしくていつゝ徒から
たゝさとしく
露そさそひしかは山けれはこの野ふ日もくれぬとて
つやいふしれ 宿村ふるさと小篠んまか堂に向かひ
こゝろ板橋何いふし田中と行 やさ町村
かんま堂村(閻魔堂)いそし田中村あまさ町の民家
あり 鬼屋金村(天王の社あり 石のさか)いそし田中 法川村
いふし田中ともらの村とを川乃橋何渡り
草津驛 小舟くもしまち日くれ遠ざかれて

いそくんの陰かくりしより老曽の森なといへる
所もいつくなりけんしらてすきて思ふらしいた安
里しらぬ也
五月一日守山をすきて草津 草津より東はいさゝか名所の故来けし人これ何ともく故なくけしく不記
例か此所を出ていとちかきおほえはこしかたの
みちのりよりはつかに過ぬいつなのおもひやられて
わたるはいとも所もなく民の家の立ち多くして
いとしれこなたにそいかたり所乃内に三程乃
社有り寄作物田中といふ所大小湖のほとの
さし瀬と思ひて西に膳所の城みゆる見えたり
分て山ちかく前後のかたはらし湯とかくにそ海かなと

とらくと比叡の山松なとしらぬおほゆるにいかさにそ
ひとへすて行く也 野路の宿 名にし負ふ 安藤の浣
四宮川のつねに水も流れて駒の陰ね打ちつゝ秋
なかまたそ行くこれ それとなく
此里をそのかよひ小萩に思ひ初そね
露らくかかる瀬の浦乃志の原乃秋ならてあはぬ
塩乃衣の いかなる田中の松の蔭にて湖と
思ふて志らん乃山なる行く地に浦にて
る秋しるや南の大なかり山つゝ入り
行く右に野路のかたそらかとする
川の橋をわたりて右に小松原にて右は湖のほとり

それより湖辺に大かたへての流といふ川あり行々て
かさぶ原 民家五十戸計その町を過ゆく
家もなく桃林ありて宿へゆく杉の木多く杉原
湖のほとり湖の辺をさり膳所の辺に近き
くだりゆきさりて左に杉原あり民家四五
戸あり 波多の 行々て 波多村 民家七十軒 たゞし右は湖の
社あり行て 波多橋山のごとし 此の方湖の
よりて人あり 川に渡る 其より左に行に
ちいさき社あり 行て木の林のほとりに人を
しりぬその景しきさまに目を移す代々
民の家も其くらしして浦竟

こゝより少し行て長橋あり渡りて又ちいさき橋
をわたりて 民家五六十戸あり 其をさりて左右は田
中に行 左右田畑に見えて 山をのこり 松あり
山をさりし 膳所の法師のたまひし御寺
とうみ見えし 粟津の森もみえしと見えし
桐坂の関や粟津の原見えて 此所に粟津の
森のちかき 左右田畑見えて 湖のほとり
家も今井四郎兼平の墓あり 粟津の原なり
さいかちの木あり 田の中にたてられたる塚
ちいさき古跡にて 大きなる石塔人
田中に立てかくれなき所にたてたり 今寛小

しもみ堂乃松をみよせはゆきて薪ふくさ
れける粟津か田よりかれくはてはまれしも
ありけん昔乃ことつり行きあいとおもしあかし
左の山より湖の面さへ山よりえかれて
東南乃かたにみつゝ山の舟よせすくれ
家に入てしばしうち湖へ入り猶みえ行ぬ風浪高
うみのなかせまし見る浪もなれゆく
山へとなりつゝ船よせてうらかれはかゝれなり
行くに瀬田大橋の波さへみえけ
里まつ芦の中に細舟かしいかなる
みてくる人共まてもえて竹のはなえさそう

家おほくしきよりて家かしこふあかくさき
て膳所城邑草はゆいかきし浦の浪にひ
かゝりしもゝえ見えてまいりくるかたにある
石乃鳥井あゆみかたの浦をそくて見つゝゆきし
ゆきて草津より家ゝ行まいて二里なり
湖の湖中にいまし行けふ山ふもとへこゝにおそく
家かし坂本の家からし龍王の社かし家かし
ここに行て高木の明神の社ありそこに来
といふ膳所の外郭とて、しんじ大き
湖の上浪さはほにてなかとのそこみ外え
山を屏風とよそえたる宮にて湖のおもてちよ

めぐりに天台山の高嶺四十あまりは限なく
山田矢橋のわたし秋の帆ゆあまたか往反たり
唐崎乃松乃風よとそよと拝まして東西たりは
粟津の月中もさらひつくしてか腰もひ
しかに湖水初瀬の御前ふ静まへりけら
ての浜とよみせ給ふ事并不のなりまし
大津驛 膳所より民家つゞきしといふのため
も三井寺山にてちらに木の葉定てまけふ
鳴らしらかのぐ見ゆし 長柄の山とは
これ并町のかし小関の此并あり 并不ある
くして民乃家る 所町にわかくして
書きけくまへりしねをしゆしとそふりてつとならて
かしこいはとこらか 相坂の関となせるをうくゆうじ
たてり山のうしろを行小三関の明神といふかゝり
かの蝉丸乃こらし往々は家の琵琶乃しらべと
云わらこもん 博雅三位といひしは 蝉丸
は延喜第四の宮なりし此関のほとりと岩河本
とおつくゆかし記よりもとり又今昔物語
云昔よ源博雅朝臣は延喜の御子兵部卿克明
親王と申人乃子なりけりよろづの事いみじくかし
せし中に管絃乃道なんきはめたりける
琵琶なとも微妙に弾給ひ笛も艶に吹

又むかし逢坂の関に一人の盲いほりをむすひ
すみ住けり名をハ蝉丸といひける此ハ敦實と申
せし式部卿の宮の雑色にてなんありけるその
宮ハ宇多法皇の御子にて管絃の道にすくれ
させ給ふ人にてましましけれハ年来琵琶をひき
給ふを常にきゝける程に蝉丸琵琶をなんめてたく
よく弾けるに此博雅卿ハあなかちにこのみて
求けり彼逢坂の関乃盲琵琶乃上手
なりときゝてかの盲か弾琵琶をきかまほしくおもひけれと
盲の家異様なれハ行事もせすして人をやりて
蝉丸によういはせけるハなとかく思ひもかけぬ所にハすむそ
住も京に来りて住かしと盲これを聞てその
答をハせすして曰
世中ハとてもかくてもすこしてん宮もわら
やもはてしなけれハとよめりけれハ博雅卿
三年の間夜毎に蝉丸のもと
庵のほとりにたちて流泉啄木乃秘曲
を伺へしともしりけるにとかくして山陰に
関の方の秋の月曇なく照けるに
いよいよさえわたりてとのゝ
けれハ
あかつきかたに蝉丸ひとりして琵琶を弾しけれハ

相坂乃関　関乃岩かとやなかりし　跡なり
伊せへ参る行ふみてかへしとにかられ松の木
湊渡令りにいまやむくりんとうさとえし
貫之か古風なりしかより鴨長明か定家卿
相坂の関乃清水のもとにて一とせしまきみ
水をとかへりし人志り伊勢先の志らふみを
いつも清水のきわの家よりいつ家をあそ
ある紙くれをしるし志る待る人もふかし
三井寺よ圓寶坊の阿闍梨とてよ志信さし
むかしより喜和と志まてかへ紙どさ哥あまり
さうとよみつねるをもかし日まこ志るん極ハ志る人

もかくてふることぬへきすとも人よふへいひてかへりもとう
うしつゝ人ゆきてかの一行さり志れゆく人のかへりし
さりて建暦のころしやかとし十月廿日一行より
の比三井寺へゆくあさり對面してかたみに
かうれすときの母やしくもらんへとかへて徐う
とめつゝしくらんいそちも志る人傳らんとめ
まかりひて中く圓寺より西へ二三町とあり
行そこら北のつゝふますしたつ一行をつかれる
あふ一丈のりもなきかたにいわそのたまゆ
名んしへ三尺計いてりてくむめる所ハかしとか
いらしゝの實乃清水の跡なりたるりとそ

三坂のやいうきたかりん行き小家ありしも人ありて
當代きのくもれくらありん前とものゝ稀とせし
のみあれけりしけふいかんとていそはあらん光ゝ給
ましとりぬくゆきいはれくの後ふくらかりん
異人小ふ人しき次にゆきしきと今山の鏡き
御帳もしあつて為寄ゆりかれさせ給ひぬとて
旅の人しとそうら山もそ今海のつゝかへとの
ゆらんをとさりしに人無しらけるゝつとうし
まさかこ色ゆかしりん之梅の袖ゆまし
つて行ゝ上る安都をよふゝ錦まりゝとふん
目もはゝ小杉し宮ゆゝて大宮神家大名の

方の山小島井と光明寺といふ寺ありとい
顔守なら神の為弁なりし此大宮に對と
まらら家ゆかし所ゆ池の川のけといふ所行
らみ延分大津より宮しいつかまて家つとり
人のちよりさあらは今よりてう大のささ東へか
かりにた君御人之行やゝいうかし野行
かくれしきといふ大の方の山ゆらひより関の
うれしととふみたりし　音羽の峯ゆかへて
きくまれて
音羽山ととかゝくうん旅の関のうれしゝ京
曲ませていさゆきし　ゆ山き道のこまかゝいたの

さて南の方へさがれは右に尾崎より牛尾観音
ありとぞ西北の山きはより四の宮の民家
みゆ山科野四方皆山にて人家まはらなり
遥に見えたり西南の方に森の中に
民家見ゆるは音羽の里とて西の方あふきと
いふは日の岡とて都より大津へのかよひ路
音羽河原青羽の里と云よしは二の宮の北と
此里は山科にて是より南は大塚村
はるかにみゆるは いはちかくみゆるは花山とも大塚の
花とはいふなり やかて松をもゝくり生地花かすみ
さて山科大塚山とて山の尖れるかたにいへるは

大宅村と申すは岩屋三社権現ありしよりは大津
より宮にいたる道にて二里 村はいにしへにちかき
此所に花山を小町といふなりまたすへて山ざと
の四方みゆるつゝきれは小野の里といふなりや
まちかたの小町か住し跡といふ所あれは
花もあり業平朝臣松なともいひて侍るなり
月さえ行きよにみちぬるみちを行きつるも我
やよふかくてとつゝむ栗野の中よりすゝ上の方
と詠しけり思ふは詞にいはく妹風のやくに
つまくれなゐのおかしくといふにかくしはかりして
見えつゝおもひこそとりもしかにさしふく人き

身死人のかしらきたりあなめ〳〵とふ声しけれと
みえけりかのどくろのかしら目よりすゝき
おひいてたりけるをぬきすてゝおもひけれは
そのあとにれのいたましくことのかなしきをうたれと
聞くにあはれにてあやしみ人よ声ありとふ
あるとき人ありていはく小野小町といふ人ありて
出羽よりして京へのぼりてありけるか頭
これあはれにたへかねてしき業平にかしくこえ
なれとも流浪おとろへて下のみとつまをことのと
そのうちにすみなれしかりしかとつまにわかれの
野にて玉造とのといひける人文高野大師も

はしらせ給ふとありしほとなりにけりとてかつ
ますかれうみ此道の方をなしつゝその路
道のありき径のかたり連のほとに女人
をかんとせかしけさとにはこ路かしらは霜の
蓮のとしこゝろにそ和泉に似たり背きは
さら筋ありて西く行く道さこしめりたまう
みして衣なくしふしかして履なし都へ
ありふしとけさりは是なへ世のありしわかさりを
衛門しりしかは路の後にたちてらは帝女
ありそていはく此をいふ後の郷の人誰家の
子ぞ女なたへてれいく者ぞ其の侶家の子良実の

娘かり壮なりし時は憍慢放ちかはさし形
たゝりし日を愁歎おほし齢いまだ二八の
貞にをとこにあはで名を殆ニ千かけりてみかねて
花のさかりおもふにいつくしかりける外に
おもひしは玉のこしのうちにかしつかれて
かざしおもふさまにゆくらしかりきうらやみ
ふるき事にしかかはらく〳〵霊ともなりて
ゆるしし庵かく秋のわかれまさとそく菊
とてたとしらは西ともりけて只にの子
孫を婚姻にかかりしけふ富貴の主容を
倹傑ととりしにさりあちしてゆうさんて

たゝりしを〳〵かりれしたは王宮の妃ささて
もわりんとしあこきのしくりのこにりて凡家の
妻ふつけれんとのかさらひあしき世門十七
にして母とうしなひ十九にて父とおくれ
十一めして兄とうしなひ二十二にして夫ふ
わかれおもしろふを孤館ふのそく涙にれし
それより孫兵ふのそむくりりかの富貴ゆう
ましれ衣食の憂とをるるそのふ何まれる
のりんがたくりさらをけくてたゆくてゆまて
乃うんのたりりへは何きるかひ身をとりあり
かすらいは友ありとしかうひ富をうしなつて雲とこさし

あゆみかへりきこゆれはいと哀に思ひやる所かなし
いまさらになにし思ひし浮世の里くさ
はやしのたえ〳〵さかぬまてとのつくりなとよりは
つらく竹の繩垣もさしわたつゝあるさまいとさひしく
かくしみなれて哀ちられたりしまして秋の月
ことよりつらは里のもの思ふなまつはへかゝる人の有
つらくわくさむきにいやましにうけこゝかしこに
小田ゝよしつてちゝにさかたに山の院さまに浮そへ
家ありさいとあはれにしく奥の人かあなか
大将のかしこくかゝはらせ給ふてあれまし老
志けき中にありしのはなしし吉野山より

にふきあはれにおもひつゝきてすゝめかたに
秋風にわれ小野の藤原とゆふくれにわく
かき行かちたしさまに揚代ちつらねて醍醐寺とふ
所ありいつる勧修寺の門をさして過にし大
乃御所寺てつかはれ寐覚ともくあさひ
紅葉のよにあるに古木の桜わたくなくて秋
くれなゐの花をさそひたりしとをりにやと秋の
中々しき酒の傳より厳のさまとら
かなてはしめてのそくにうきんの衣乃みちて
らうたけかにしはへきさゝら法師經より
かゝり思はむ所なからまたはりつゝまあり

外にはうはらのめのそたしよみゆるへてみゆ
ちりより此営社名ともつらなりわたりしくて
んと見ゆるしるしも松かけにある人の浄衣なれとも
うれしきやかしこにもいさゝかのつともなしるとも
いとしみしみしてたりし此所の民おほくあつまりて
るさしてうまれけるにいそして中山のあたりの行
左に愛宕寺山をも岩のほかに岩かくれしに所
なりとなしきけるに大なる岩あり此岩をもて
所の名とすかはるや中なる山 香山 なりけり 此あたり
根岩ともいふ中山の何かとも行て此所に根あり
ともいふ所なる岩の内より橋をも里人もいふ

人切橋 むかしこの橋にて盗賊の人を害すと云ふ事 やかて中山の麓をめくりく
すみ里計行て岩口といふ所より宗屋にいれる 根岩
何ともなしいそし小坂あり
笑坂 是より帰る人の此所にて深草の里を見わたしてわらふと云 やかてのほりゆくとへかへりけれは
深草の里いとちかく見にみえて都への秋風
を身にしむものからものそめしむるに
愛宕山たかく雲にいりて人にうらみさせてうしに東寺
の塔のいらか丹青をまじへてまし日影に
かのめかれぬ何かへりに清水の林の営社
民の家の数知れすとをくへ行かさなるに計
わかれとまりかそ見とかれぬかなにゆかしき

南朝の四百八十寺もかくこそありけんとおもひや
らるゝ跡とのありて民家にいりまじはる
大工町より北の口めして大路こそ二条の
金城の楼閣日にかゝやきて行きしくゆくへも
うつはと寺々のそこかしこにあらはれ松の
森にありけるを神の社ありてそのかたはらは
松の枝をおほくさ花のうれはなは藤の森と
いふもありて馬かけのとのかくしき
是や多からて一品舎人親王といはひたてま
つる社なりしみそ和漢のゆへ
ゐとかしこく家國のかられためしちりて

つかれ神の御代よりうれ行はれ代々にさかえて
賢主聖主の治世の人々すゑまでつたへこし跡
ありしかしこれは月なかりしうれ法つね
くありけれて天平宝字のかしこし道とはるか
藤原ゆくさかんにありてさて御追号をや
せ給ひぬかれしかれとも神のちの祭りの
ふさしはさくしてはしらかしきもの代々絶ゆる[illegible]
ゆゆくさりてまつりしかしたしかとたえた
しりこ和へ行ふあり町かあかくきてこゝろ
家のまへにすこそめ井しいてきたしりいは氏
そみ色思ひうしくとへいそれ社の奥しり

まことめしきつくば山木乃梢にのりしえうかんつき
うみねとりと年のりはとよしさくらくと
いとゆかしくまゆれて天の由やしらたりと
あまいそうらる人の風に秋くおもしいおう
ひと思かの前に源氏のおもへうさくうとよ
されとその縁ちうされ家もしし
くさまさきしはりとさうされてお家のやう
うまとりしてまりし御所町のさまでかしと見え
ちり行らし小此成と豊臣の前殿下宮居
ま残し此春秋はその代々のちりにたりせし
跡を園し乃名とある所にまて春の行くして

天の下おさむることのうえ毎乃家とうしかたん
今は五代帝御おうれめてそれうしさあはへの
あられたてこの〇のてちうしとめしうされかそも
そのし殿原とへといふのとさしに獲藏ある
元塚名妹にして秋の竜の風に威をゆくへの
国ふとらし文雅のものんまさりしの蕭墻のう
ちうちおんとは康保にして馬とどし世乃
とまふ梵釈の一雄とりて感陽三月のかの
とゆにはぞししため天勅さいそのへさ御おうよ
うけてにはいますう行氏の家乃庭も葛ゝ妹の
みちしくものはにそのうきよしし乃絵を

をのこあまためしつれてさしもやとひ出て
舟出ても漕ぎまかせはや
いとしくにはとしのひれは山城の方こなた里に
至しはらくかくしつゝ淀のわたりと舟に
のりゆくにいまは都へもしのはしりけりあはれ
なし

里のなにもしらしみちしるべけとなかめもや清にて
おなしく川の芦おほつまにいとこちられ行に
淀の堤川にそひて柳の枝にとられあはれなる
あけてそこにかの茂れる葉をいかにつたへて絶えす
ゆかしく思ひつゝのをとるもをつかはしけ

うちみわたして見やりし里は清水八幡は西南
の方にてさしも八幡山のけふにぞ峯とみゆる
にこの川のなかさの淀に揖もとどめてこれに
まうちゆかうしけるに行にまつく淀の橋は
いさゝかにてかたかくてなんくれにこえゆかる
山崎とや宇治などをかへてひとつの里の外を
さ川の名をあるかはなくの岸にむしてゆく
絶えてなかにはこれ世にかはる人の行
にはるしてけふのあかしていはむかれ
とふつくりてあはせてあかねさいかはあまた
見えていふにしの水にもえあかりて志る

きりの外にはかりて秋しらるゝ田かくれ
ぬしりたて水車の活かくめくるも心し
きれとわきもそうき母のしるしとられたる
ゑをかふ弟のゆきぬるを良するものくるを
あ私くかねしもしへミふあり孫したちる
と思すてくしかしけすてしめくきぬる
孫のうすふ弟の徳をつしれたきあはせを
蒼天の下に此秋の暮の民かる思つれかし
いくへかなりせむしかゝ里にこそいはま
かしし孫かのしにほすしひ都ゆかへ遠
いさやめしもし　陶潜五柳のくすまうち
うしつゝつゝく行やし帆ちるうへ八幡山を
いつらいつき帆帆のけふらゆる山しといつくと
ゑいやいつ秋人をまつして鏡の秋し
こゝろちよき淀の舟とさしゝりん行先ふきまる
山をいつくそしれさる水の音しれと川の
あらさはかりし沙みなそしいしれさ
かるさま行しつ秋の河の音水ふきさらいて
さかにしそうしあらはれまさりのなり
寺帆とあけて風よ海しはさ後みつきいかも
いき里く江木かくれよりん舟まぬ浪ふきうえ
歌に鶴のうけふ秋こゝろさつかくよきあし絵

くしき筆をとゞめはしけり家しく清きなもしくこの
川の太(の辺)りさに山家の民家にけりそれなしの
山の勝にくゑりし寺とりや山のさる寺の新緑
見えて峯はいとさうにて緋の玉垣のかけやの
うれしとかいなう神そしとし御杖して天王の
示しゆとひてる松子し山に清しきて離文
乃八幡にりてあしかれなりにあさきたりる
杉とし山の水にかりからてたりし寺にも山見え
見て上まれて見をとらやうれぬものしり行月の
かけり行ふ月れしさの哥ふ秋の乃やくそ
いとはしと見え御小樋すくかりしと筆

にかゝる心ちして此世ならぬ程にかれしさまさも
天にも此頃の流れん御手て御人とありさくし
くふかいの寺にをりしくて露源とうしへ
身の程をせんに来りしあらぬえし妹の
春天よりみてさゝさ寺の鐘の声の梅うし
日の色のつとさけしけり大坂の地に流
ま思ともの和人ねらしくもちさりにて
その岸に和しよせね松かりけりて
宿にいつかんとそうに来ろとて三更すぎる也
らんとなかりに人もいかにさかりして松とも
よりしつ道にゆゑら行りつくんそさりこへ見て

あふきのみかどはかの里人の家の辺かしこれ家
の門に立て御うかゞひなさるゝにそのけしき
まことにその朝夕かゝりて煙かしけ
絶けりあしたゆふべのわすれぬ世の御なげきのみの
御衣もあらためられず御芦葺の宮殿の棟も民の
かまどのけぶりしげりしの宮の軒も
ゑみ瓦のいらかとあれてくちはてしも御志ゝるへし
仁徳のみかど難波の都にして御まつりごと
志給ひしかば四年といふ二月に詔して
みことのりしてのたまはく朕たかきにのぼり
のぼりてはるかに見るに烟のたえにたり思ふに百姓
まことに貧しくしていゐかしく立つのあれてらしかう
ちかきもかくの如しいはんやとほきくにをや
今より三年にいたるまで悉くの課役を
やめて百姓の苦をやすめんとてよりし其の
時節は宮殿やぶれたれどもつくろはせ給はず
はらひもやぶれこぼれても修はず風雨侵
よいりて衣被をぬらし星辰やぶれより
もりて床蓐をてらせり其の後風雨時に
したがひ五穀のみのりつねのごとくにて
ゆたかなる民の烟ともしきりにたちのぼりしを
帝は七年といふ四月たかきにのぼり

ぬよりて遠く民家のけふりとのたまはせ給ふ皇后
しかうしてのたまはく朕すでに富めりなにを
とうれへんや皇后のたまはくみかどのたまはく
みつ垣くつれ給ふをつくろはせ給はす御殿やふれて
まくらをぬらしつゆかへつてみかとの富めりとのたまふ
まことにいはれなきやうにこそ天皇のたまはく天
つかさどる百姓のためなれは君は百姓
をもつて本とせり世をしろしめす君
の心さし一人にても飢寒をいたさせ給はゝ身をせめ
給ふと百姓貧しきときは朕が罪なり
百姓ゆたかなる時は朕が富めるなりといへり

あゝしも百姓ゆたかにもちけりこの御門こそ
誠の仁政をほどこし民のくるしみをしろしめす
聖にておはしましけれ されはこそ御名をも
仁徳とは日本紀にもしるしおきたり
たゞし今の世の人のやうに御代ゝ
くらきおんことなりあそひ見えし
難波の京にかしこく大和の民の
ゆたかにして富人もおほく
きねの音にきこえて家ゝに一歩も
こゝろゆたかに家の
けふりたえてゆたかに一足の

なむしまふれが世へふ今こ此国中もいてうき也た

り給のこ書の紙ふハ何らし世のすゑもみ給ふ書う

らん杯とさうよ多く佗とも見りつかハ佗の中ぶハよ給

けりるゆゆしもあさされん田舎の帝の庵ぞ給と

そかさうして申らんとハいらしし あ排ことの紫の

花のあれくんのゝ色まくまりのてくそてにのつねし

そのことの御まつにまもそ西あやて侍らしも

つる悔し 世のあきらけれとよしとこうしとる

かしの秋の昔し 平氏正直 飯塚平右衛門尉 ら佗給

書記し也

国立公文書館
National Archives of Japan